

〔研究ノート〕

「柿本宮曼荼羅図(大和文華館蔵)をめぐる」

当館が所蔵する「柿本宮曼荼羅図(以下、本図と略称)」(挿図1)は、天理市標本にある和爾下神社の社景を描いた垂迹画です。近代の実業家茶人を代表する原三溪翁遺愛の品であり、旧国宝に指定されていました。

和爾下神社は「延喜式」所収の神名帳に「和爾下神社二座」と記載され、十世紀初頭には既に、朝廷に認知された神社であったことが分かります。古代の交通の要衝である上ヶ道と横田道が交差する場所にあり、祭神は大己貴命・素盞鳴命・稲田姫が祀られます。この辺りは、標井氏・和爾氏・柿本氏などの本願地であり、歌聖として崇められた柿本人麻呂はこの「柿本」氏から出たと考えられています。平安時代末期には、彼の墓所が同社の神宮寺である柿本寺にあったと認識されていました。その頃活躍していた歌僧、顕昭が寿永三年(1184)に筆写した「柿本朝臣人麻呂勘文」に次のように記されます。「添上郡石上寺傍有杜。称春道社。其杜中有寺。称柿本寺。是人丸之堂也。其前田中有小塚。称人丸墓。」これによると和爾下神社は当時「春(治)道社」と称されたことが分かります。ちなみに「治道(はるみち)」は地名として現在も残されています。

柿本寺については、平安時代に東大寺の末寺

であったことが知られますが(「東大寺要録」、当時の詳しい状況は分かりません。ただ、標本一帯が東大寺及び興福寺の荘園であったことから、柿本寺・治道社が両寺と密接な関係を持っていたことは想像されます。

ところで、平安時代には和歌が貴族の間で流行しましたが、人麻呂に対する尊崇の念も強まり、彼の画像を本尊とする「人丸影供」という法会が盛んに行われました。鎌倉時代に入ると「柿本講式」と称する儀式も行われ、人麻呂像が神格化されていたことが伺えます。柿本寺の人麻呂塚も和歌の詠み手たちの注目を集め、記録に残されています。しかしながら、十三世紀には既に荒廃していたようで、鴨長明が著した歌論「無名抄」[「人丸墓事」]では「人丸の墓は大和国に有り。初瀬へ参る道なり。人丸の墓といひて尋ねるには、知れる人もなし。彼の所には歌塚とぞいふなる。」と記されます。また文明八年(1476)の沙門慶範による「柿本像彩色勸進帳」には「今はりみちの堂にかの影(人麻呂像)あり。星霜かさなりて草堂敗壞をなし、雨露におかされて木像の彩色分明ならず」とあり、柿本寺に安置されていた人麻呂像を修理するために、勸進が行われたことが分かります。

ここで本図を見てみます。画面上部に廻廊に囲まれた社殿を描き、祭神の本地仏が円相内に表されます。楼門からは石段が延び、それを下ると十二社・弁才天社の二つの社殿があり、本地仏である十二神将像が雲に乗っ

て描かれます。画面中央、向かって左手に目を遣ると、礎石が整然と並んでいます。これが柿本寺跡と考えられ、本図が描かれた頃には既に荒れてしまっていたのでしょう。その左側には、樹木の繁った築山が描かれます。これが歌塚と称された人麻呂の墓です。このように本図を見ると、現実にあった景観がかなり忠実に反映されていることが伺えます。

実際に現地を訪れると、それぞれの位置関係が変わっていないことに驚かされます。鳥居をくぐり参道を歩いて行くと最初に見えるのが歌塚です。現在は公園として整備されていますが、中央に小さな墳丘があり、歌塚が建っています(挿図2)。碑文によると享保十七年(1732)、森本宗範や柿本寺僧によって建立されたことが分かります。さらに参道を進むと、十二社・弁才天社があり、石段を登ると本殿に至ります。現在の社殿は桃山時代のもので、重要文化財に指定されています。帰り道、柿本寺跡の標識を頼りに境内を降って行くとさらに驚く光景に出会いました。薄暗い木立の中に空間があり、地面には礎石の跡が点々と残されているのです(挿図3)。ひっそりと静まり返った治道の社を歩いていると、自ずと本図を臥遊するような心持ちになりました。

画面上部に描かれた東大寺山や、建物の間を縫うように描かれる霞の表現を見ると、本図が春日宮曼荼羅の構図をもとに描かれたことは明らかです。春日宮曼荼羅は、同社の祭神を礼拝する目的で平安時代末頃から描かれ、鎌倉時代には構図が定型化し広く流布しました。中世を通じ、春日社のみならず様々な社寺の景観を描いた垂迹画が数多く生み出され伝わっています。本図の表現に注目すると、十二神

将像の表現が「興福寺曼荼羅図」(京都国立博物館)の天部形像に類似し、東大寺山の樹木の表現が「金剛般若経」(大東急記念文庫・1273年)見返し絵に見られる御蓋山のそれと、たなびく霞の上から樹木の墨線を描き起こす描法が「一遍聖絵」(清浄光寺・1299年)中に描かれた霞の表現と類似するという先学の指摘があります。自然景の描写は十三世紀後半の作例と共通し、本図の制作年代を推定する重要な鍵となります。また、同時期に制作された春日宮曼荼羅に、本図に通じる画風や構図を求めると、湯木美術館が所蔵する遺例(挿図4)が想起されます。同絵画は南都絵所芝座の絵師、観舞法橋によって正安二年(1300)に描かれ、春日宮曼荼羅の基準作として知られますが、華やかに咲く桜や土坡の表現、帯状の霞の配置などに類似点が認められます。

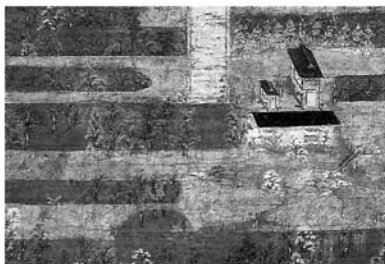
中世の標本庄では、隣接する荘園を経営していた興福寺と東大寺の争いが頻発していました。この場に鎮座していたのが治道社であり、歌聖柿本人麻呂と縁の深い土地でした。すなわち、興福寺や都の貴族達にとって春日社同様重要な神社であり、本図の制作にはこうした人々の関与が、まずは考えられるでしょう。

(学芸部部員 古川攝一)

※挿図4は特別展「興福寺国宝展」図録、朝日新聞社、2004年より複製致しました。



挿図1「柿本宮曼荼羅(当館蔵)」部分



挿図2「歌塚」



挿図3「柿本寺跡」



挿図4「春日宮曼荼羅(湯木美術館蔵)」

季刊 美のたより No.165

平成21年1月6日

発行 大和文華館